

## 「リズム」に注目した能動的な音楽鑑賞の指導

学習開発分野 (19220911) 芳 村 彩 夏

本研究では、能動的な鑑賞授業の実現に向け、楽曲の「リズム」に注目した実践を行った。実践の結果から、生徒の「能動性」が表出する場面が明らかとなり、音楽科の鑑賞授業における新たな可能性を見出すことができた。

[キーワード] 音楽科鑑賞の授業, リズム, 能動性, 知覚・感受

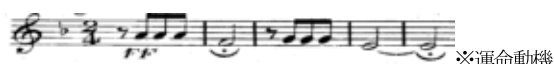
### 1 問題の所在と課題

本研究では、能動的な鑑賞授業を実現するため、「リズム」に注目した実践を行った。楽曲を鑑賞する際に、音楽を形づくっている要素である「リズム」に焦点を当てた聴き方を促すことで、鑑賞の授業における生徒の能動性がどんな場面で表出されるかを検証した。

音楽科の鑑賞の授業では、生徒の能動性を引き出していない現状がある。それは次の 2 点に見ることができる。1 つ目は、鑑賞の授業が、楽曲を鑑賞して感想を書くという一連のパターンになっていること。2 つ目は、楽曲を聴くことと結びつけられた活動的な内容が希薄であることである。

上記のような実態を鑑み、従来型のパターン化した活動が希薄な鑑賞授業から、能動性を引き出す授業へ変革をしていく必要がある。そのため筆者は、「リズム」を楽曲の能動的な理解につなげる入り口として設定し、「リズム」に注目した鑑賞の授業実践を行った。

以下は、授業の中で注目した生徒の鑑賞の 2 時限目における発言である。TK さんは、ベートーヴェン作曲《交響曲第 5 番ハ短調》を扱った授業の中で、「運命の動機」を楽譜上から見つけ、マーカーで線を引いていた。「動機」とは、メロディーを形づくる最小単位であり、《交響曲第 5 番ハ短調》では、いくつもの「動機」が反復されている。



※運命動機

TK: なんだこれ、動機がいっぱいある。

EK: 訳が分からない。

TK: とりあえず全部塗っちゃえ。

(楽譜上の動機を赤のマーカーで 10 分ほど塗る。)

TK: え、これメロディーないじゃん。

この発言から 2 つのことが言える。1 つは、TK さんが「運命の動機」を楽譜上から探し、マーカーで線を引くことを可能にしていたということから、TK さんが「運命の動機」を視覚的に理解していたということである。2 つ目は、「え、これメロディーないじゃん。」という発言から、TK さんが「メロディー」は本来こういうものであるというように、イメージしていたということである。このことから、TK さんは音楽を形づくっている要素であるリズムと、自己のイメージを関わらせていることが分かる。さらに、TK さんは 2 時限目に楽曲を鑑賞した際のワークシートに、「こんなにたくさん動機が出てきているってことは、ベートーヴェンってメロディーつくるの苦手だったのかな。」と記述していた。このことから TK さんは、鑑賞した楽曲に関して自分なりに根拠をもって批評していると言え、この捉え方をこの後の授業の中で、さらに洗練していくことが期待される。

「批評」に関して、中学校学習指導要領(平成 29 年度改定)解説音楽編では、「鑑賞の授業の中で批評したりする活動を取り入れ、曲や演奏に対する評価やその根拠を明らかにできるよう指導を工夫すること」を示している。これらを踏まえて、音楽鑑賞における能動性を以下のように定義する。「音楽を形づくっている要素と自己のイメージを関連させ、楽曲に対して根拠をもって批評して楽曲を鑑賞している姿。」

本研究では、「リズム」に注目して生徒が能動的に取り組める鑑賞授業のあり方を検証していく。

### 2 先行研究の検討

安藤(2016)は、教員養成課程に属する大学生を

対象に、以下の活動を取り入れた模擬授業実践を行い、能動的な鑑賞授業の実現を検証した。

- ① 批評文や対話を活用した言語活動
- ② 手拍子やステップ、指揮などの動きの伴う身体表現
- ③ 絵や図形などの描写表現

表1は、上記①②③の活動を取り入れた安藤(2016)の実践内容をまとめたものである。①③では、音楽を形づくっている要素の知覚と自己のイメージしたこととの感受の認識を表現することを目的として実践を行っている。

表1 安藤(2016)による能動的な鑑賞授業

中心となる活動	教材のねらい	扱った楽曲
① 言語活動	「速度」の違いによる知覚・感受をワークシートで言語化する。	オッフェンバック 《天国と地獄》序曲 サン＝サーンス 《動物の謝肉祭》より《カメ》
② 身体表現	曲に合わせた自由な身体表現を通して、楽曲の雰囲気をつかむ。	アンダーソン 《シンコペーテッド・クロック》 ムソルグスキー 《展覧会の絵》より《卵の殻を付けたひな鳥の踊り》
③ 描写表現	知覚・感受したことを図形で描写表現する。	サン＝サーンス 《動物の謝肉祭》より《水族館》

例えば、実践①では、オッフェンバック作曲《天国と地獄》序曲とサン＝サーンス作曲《動物の謝肉祭》より《カメ》の2曲の楽曲を扱った。2つの楽曲は速度が全く違うものの、同一の旋律が扱われていることを認識するために1曲ずつ鑑賞し、知覚・感受を促している。学生の対話やワークシートの記述から、①～③の実践では、学生が楽曲を鑑賞して音楽を構成する要素を知覚すること、そして自己のイメージや感じ取ったことの感受の相互の理解が可能になるということが分かった。

しかし、これらの実践は、楽譜を根拠にしていないという点では知覚したこととの根拠となる部分が薄いということが言える。例えば、《天国と地獄》と《カメ》の2つの楽曲を取り扱った実践において、学生のワークシートは速度に関する記述が大半を占めていた。楽曲における速度の知覚は、非

常に大きな気づきであるが、楽曲の鑑賞からの知覚は速度のみで良いのだろうか。楽譜を見てみると、《天国と地獄》は2/4拍子、《カメ》は4/4拍子で楽曲が構成されていることが分かる。2曲は同一の旋律であるが、楽譜を見ることでそれぞれの楽曲の拍子を知覚することができるのである。

さらにこの2つの楽曲は、楽曲を構成する調性や速度、拍子が異なっているのにもかかわらず、旋律が全く同じ形で楽譜に記されている。2つの楽曲は同一の旋律であるという事は聴取のみで知覚できても、旋律が同じ形であるという事は楽譜なしに理解することは難しい。楽譜から読み取れる視覚的な情報は、旋律の形以外にも強弱や音楽用語など多岐にわたる。これらの知覚を基に、楽曲が作曲された背景や作曲者が楽曲を作曲した意図への理解に結びつけることもできる。耳での聴取を越えた知覚は、楽譜を用いることで可能になるのである。

鑑賞の授業は、他の表現領域である歌唱、創作、器楽の授業形態と比較しても楽譜を目にする機会は極端に少ない。安藤(2016)の実践では、活動の活発化という点では、能動性が高まったという結果であった。しかし、聴取したことだけで鑑賞を完結して良いのかということを考え直す必要がある。

### 3 実践と結果

(1) ベートーヴェン作曲《交響曲第5番ハ短調》の教材性

本研究では、「リズム」を単元全体を貫く音楽鑑賞の見方として設定した。本研究の題材であるベートーヴェン作曲《交響曲第5番ハ短調》の第1楽章は、楽曲を構成する上での最小単位となる「動機」の反復・変化が顕著にみられる。さらに、《交響曲第5番ハ短調》は、「動機」という特徴的なリズムに焦点を当てた聴き方に特化した授業構成を可能とする教材である。通常《交響曲第5番ハ短調》を扱った授業では、第1楽章を通して鑑賞し、楽曲を鑑賞した感想を書くという扱われ方である。しかし本研究では、音楽を形づくっている要素の1つである「リズム」に注目した。そして、楽譜を根拠に知覚・感受の関わりを持たせたり、根拠を持って批評したりしながら楽曲を鑑賞することで、能動的な鑑賞が可能になるものとした。

(2) 単元の構成

山形県内 A 中学校 2 年生のあるクラス 30 名を対象に、以下に示す授業実践を実施した。題材名は、「交響曲第 5 番の曲想を感じ取ろう」である。ねらいは次の通りである。

### 【音楽への関心・意欲・態度】

オーケストラの多様な音色や豊かな響き、楽曲の構成による第 1 主題・第 2 主題等の曲想の変化に関心を持ち、意欲的に聴く。

### 【鑑賞の能力】

音楽を形づくっている要素(音色, 速度, 強弱)や構造(オーケストラの響き, ソナタ形式, 動機や主題の反復の変化, 楽曲の構成など)と曲想のかかわりを理解して、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

指導計画 (全 2 時間)	時	学習活動
	1	○楽曲を通して鑑賞し、曲の雰囲気をつかむ。 ○「動機」を数えるという活動を通して、「動機」が曲の随所に現れていることを知る。 ○第 1 主題と第 2 主題の雰囲気の違いを知る。
	2	○「展開部」の楽譜から「動機」を探す。 ○楽譜上で「動機」と「第 1 主題・第 2 主題」が展開部の中でどのように変化・反復されているのか、楽曲を再度鑑賞しながら学ぶ。

### (3) 実践の結果

1 時限目の授業の中の「提示部」における第 1 主題・第 2 主題の雰囲気を発表する活動の中で、教室後方に座っていた YU さんと、周囲の生徒たちとのやりとりでこのような場面があった。

T: 第 1 主題と第 2 主題、どちらでもいいので発表してくれる人いますか？  
YU: (挙手をする。)  
T: YU さん。  
YU: 第 1 主題は踊るようなイメージで、交響曲第 5 番の顔みたいな感じだけど、第 2 主題はきれいな感じ。  
C: おおー！  
C: さすが！  
C: 交響曲第 5 番の顔みたいってどういうこと。  
C: 確かに、パシパバーンっていっぱい出てくるし。  
HK: 顔っていう表現が面白い。  
T: 表現が面白い？HK さんは、YU さんの顔っていうのを聞いてどんな風に面白って思った？  
HK: えー、なんかよく分からないけど、自分はそんな風には思わなかったから、発想がすごい。

YU さんは、第 1 主題を「交響曲第 5 番の顔みた

いな感じ。」と表現しており、彼女にとって「動機」というリズムは曲の顔と表現するまでに特別な印象を与えているものであるということがわかる。その根拠として、1 時限目に楽曲を鑑賞した際の YU さんのワークシートには、「パシパバーンが何回も出てくる。音の高さが全然ちがくて 2 つの曲が組み合わさっているみたい。」との記述があった。YU さんは、楽曲を構成する最小単位である「動機」という「リズム」の反復に注目し、自己のイメージと結びつけて楽曲を鑑賞していた。

2 時間限の授業の中で TK さんは、展開部の楽譜上から運命の「動機」に印をつける活動の際、周囲の生徒とこのようなやりとりを行っていた。

(手元に届いた楽譜を目にして)

TK: なんだこれ、動機がいっぱいある。  
EK: 訳が分からない。  
TK: とりあえず全部塗っちゃえ。  
(楽譜上の動機を赤のマーカーで 10 分ほど塗る。)  
TK: え、これメロディーないじゃん。  
EK: なんで？  
TK: だってこれ全部動機じゃん、メロディーなくね。  
EK: メロディーないってどういうことだよ。  
TK: だってこれメロディーじゃないじゃん。  
EK: 意味が分からん。  
TK: うーんと、なんていうかさ、普通だったらもってちゃんとしてるじゃん。  
BH: なに言ってるの？うわめっちゃ塗ってるじゃん、真ッ赤。  
TK: これはちゃんとしてないっていうか、なんか楽譜に書いてあることがメロディーっぽくない。  
BH: ちゃんと音符あるじゃん、どういうこと？  
TK: いやそういうことじゃなくてさ、違うんだよな、ちゃんと、うーん、  
BH: 何が違うん？  
TK: 違うっていうか、ちゃんとしてない。  
BH: はい？意味が分かりませーん。

彼らのこの対話から、TK さんは、展開部の楽譜から「動機」が多用されているということを視覚的に理解している。TK さんの「え、これメロディーないじゃん。」という発言は、楽譜を見て始めて「動機」のあまりの多さに驚いたからこそその発言である。

## 4 考察

(1) 動機の「リズム」をきっかけとしたソナタ形式の理解

YUさんは、楽曲を構成する最小単位である「動機」という「リズム」の反復に注目し、楽曲を鑑賞していた。ある一定のリズムの反復という音楽を形づくっている要素を知覚し、動機が多用されている「第1主題」を《交響曲第5番》の顔みたいであると表現している。YUさんの「交響曲第5番の顔みたいな感じ」という発言は、「リズム」の反復を知覚し、自己のイメージを融合させながら鑑賞している。「リズム」に注目したからこそ、YUさんは《交響曲第5番》全体を「顔みたいな感じ」と捉えることを可能にしている。そこからYUさんは、動機の「リズム」に焦点化した楽曲の鑑賞を行うことにより、提示部の第1主題と「きれいな感じ」と表現した第2主題の曲調の違いを聴き分けている。

このことはソナタ形式への理解を促すものであるということがわかる。提示部が異なる2つの旋律で構成されているということを知覚し、自己のイメージと結びつけて鑑賞している。

#### (2)聴取と楽譜との兼ね合い

TKさんは、展開部の楽譜を見てはじめは混乱していた様子であったが、その後の楽譜上の動機をマーカーで引く活動を意欲的に行っていた。TKさんの「え、これメロディーないじゃん。」という発言は、耳で知覚した楽曲の「メロディー」が楽譜上では見えていないと意味づけている思考である。楽譜を授業の中に導入したことにより、TKさんの中で2つの思考が起こった。1つ目は、TKさんが楽譜を目にするまではメロディーだと思って鑑賞していた《交響曲第5番》が楽譜上では記されていないのではないかということ。2つ目は、TKさんの「これはちゃんとしてないっていうか、なんか楽譜に書いてあることがメロディーっぽくない。」という発言から、TKさん自身がこれまで目にしたことのある楽譜と比較し、TKさんが想像していた「メロディー」を再考したことである。さらに、TKさんは2時限目に楽曲を鑑賞した際のワークシートに、「こんなにたくさん動機が出てきているってことは、ベートーヴェンってメロディーをつくるの苦手だったのかな。テキトーに動機を置けば、曲になると思ったのかも。それだったら自分にもできそう。」と記述していた。このことからTKさんは、鑑賞した楽曲に関して根拠をもって批評しているということが言え、能動的に楽曲を鑑賞している。

TKさんはその後《交響曲第5番》の「第2楽章」に出会うことで、TKさんが「ベートーヴェンってメロディーをつくるの苦手だったのかな。」というベートーヴェンに対する批評がさらに洗練されていることが考えられる。動機の反復が随所に現れ、短調で楽曲が構成されていた「第1楽章」に比べ、「第2楽章」は、長調で明るく、木管楽器の美しいメロディーが印象的である。TKさんは、この「第2楽章」に出会った際、「第1楽章」で自分なりに批評した「ベートーヴェンってメロディーをつくるの苦手だったのかな。」という考えを再び問い直すことになるのではないだろうか。そうすることにより、「ベートーヴェンは、第2楽章のメロディーの美しさを際立たせるために、あえて第1楽章に動機を多用しているのではないか。」というような考えをもつ可能性がある。このように、TKさん自身の持つ批評が洗練されていくことが考えられる。

## 5 到達点と課題

知覚・感受のかかわりを持たせて、根拠をもって批評する鑑賞を可能にするために、楽譜を活用しながら「リズム」に焦点を当てた鑑賞授業を実践した。その授業の中で、楽譜を根拠に楽曲を聴取することを通して、TKさんにおいて能動性が表出する場面が明らかになった。さらに、能動性の表出とまではいかなかったが、本実践において「リズム」に焦点を当てた聴き方を促したことで、YUさんのように動機の「リズム」をきっかけとしたソナタ形式の理解が促進されることも分かった。

課題としては、他の教材において、楽譜を根拠に「リズム」に焦点を当てた鑑賞授業が能動性の表出に関わることができるのかという点を明らかにする必要があることである。

## 引用文献

- 安藤江(2016)「能動的な音楽鑑賞学習の実践的研究：教員養成の場合」、『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』, pp. 118-123.
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』日本文教出版株式会社, p. 84.

*Instruction of Active Music Appreciation  
Focusing on "Rhythm"*  
Ayaka YOSHIMURA